
作者と浦島ストーリー

あゆみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

作者と浦島ストーリー

【Nコード】

N0765N

【作者名】

あゆみかん

【あらすじ】

ファンフィクション
【FF / 浦島太郎 / 短編】

おとぎ話をシリアスのつもりで書

いた話。

(前書き)

『浦島太郎』をシリアスで挑戦。

昔の話である。

一面に見ゆる、秋に主役を張るようなススキの穂波は風に棚引いて揺れていた。近くには川が運んだ砂でできた広い洲があり、周辺に佇む樹木の賑やかな実りが渡り鳥の格好の餌場となっていた。

休息の地を求めて身の羽を休めに、列立った雁の群れが遠く夕日の彼方から使わされた者のように降りてくると、餌をついばんで空腹を満たしていつている。それを線のように細く目で眺めながら隠れて人は、言の葉を掛けて歌を詠むのだろう、指折りに数えながら、いつかに故郷を偲べるためにと独り歩きをするのだった。

夕刻の散歩はそのように。東に少し歩けば幾重の夕霞に埋もれて見える村里が、西に歩くと川岸があった。その行く前に広がる松林に吹く松風は、歌人に恋をした海女が狂おしくも舞う謡曲としても有名だが、詠み人に美しくそれはそれはそれは琴の調べで刺激さる、真、妙な調べの音色だったという。夏だったなら、霞だろうともモヤだろうとも吹き払われて、照りつける太陽の下で鴨やシギが浅瀬に戯れるだろう。それは、その光景は、今が秋であれば置いてきた夏の記憶、過ぎ去りし『過去』のもの だった。

さて……対岸には。昼であれば漁師の帆船が出入りする、活気のある川岸だった。だが今は人の姿なく、水面を震わせていた風がヒタリと止むと、鏡にも似たそこに岸の山並みが青の墨色に映し出されて静かに在る。帰った後の静けさよと、詠み人は乾いた唇で口笛を吹き、茜の染まり顔を傾けていた。羽を休めた鳥は寢床へと、これで帰っていくのだろう。

それでは、浦島の話始める。これは、浦島たろうの話である。

漁師の家が点在する、ひなびた漁村があった。そこで浦島たろうは生まれ、何不自由なく父母に育てられて、家業である漁にも度々に出て、時を過ごしていた。年は既に二十歳の頃合で、女人の極端に少ない村での婚姻は、男子には至極難しいものだったという。

そのように年も年な浦島たろうは、僅かながらに女というものに憧れさえ抱いていた。

「たろうや、これを昼に持っておゆき」

藁と陽樹で拵える程度に家は粗末に造られて、たろうは、竿を片手に釣りに出かける所だった。「それは……」「団子ですよ」「ああ、有り難い。よしてきた、もらいます」そうにこやかに、たろうは手で麻包みに入った団子を受け取った。腰蓑にぶら提げて、たろうは母親に見送られて出かけて行った。

「むかし、むかし、うらしまはー……」

こいつあ恥ずかしいと思いつつも自分で作った自由歌を陽気に歌っていた。道中、うっかりと女子おなこにでも遭遇しないだろうかと期待して若く青い男は想像で遊んでいた。これでも身だしなみには大変に気を遣っているつもりで、塩で歯を洗う際には必ずキリリと引き締まった顔でいることと胸に手を当て天に誓って決めていた、いつ、肩を叩かれて振り向いてもボロが出ないようにと、そんな肝の小さい男でもあったのだった。

「フフフン、フフフン、フフフフ、フーン」

歌は、2番へと続いていった。歌詞は1番の途中から出ずに、いつの間にか鼻息歌になっていた。

「おや……?」

たろうは、自分の歩いている道中の延長上で、遠くで動く『何か』を発見した。ススキの野っ原を沿って歩いてきた所を土手になった坂へと曲がり下っていくと、大きな川があった。吊り橋を超えてさらにもっと川を下って行けばやがて海に辿り着くのだが、たろうは滅多に行くことはない。川でのんびりと、趣味で釣りをするつもりだった。「あれは……」目を小さくして動く『何か』を探ろうと、立ち止まらずに歩いていった。

どうやら、『何か』の塊はひとつ、『それ』を囲む人間の子どもたちがいたようだった。

「死んでるのかな。大きな亀さん」

「ちよつと突いてみようぜよ」

「腹が動いているぞ。生きてるな」

3人の子どもが、大きな『亀』を囲んで騒いでいるらしかった。ひとりには拾った木の棒で亀の甲羅を突き、ひとりには小さな足で蹴りを入れていて、ひとりは女の子なのだが亀の顔を真正面から覗き込んでいた。

「こら、何してるんだ。亀を苛めちゃいかんだろっ」

たろうが子どもたち近づいて、そう呼びかけた。たろうを普段からよく知っていた子どもたちは、たろうを見るなり、「違っよ、苛めてなんかいないよ」と言い訳を口々に言い合って、顔を赤らめていた。「どうしてこんな所に亀が?」たろうが聞いても、子どもたちから返答はなかった。

亀は見ると全長が1メートルほどはあり、甲羅が珊瑚色という、珍しい……珍種だった。

「本当に亀だろっな。実は鬼でしたなんてことはないだろっな?」

「まさかあ何言ってるの」

子どものひとりが笑いながらたろうに返すと、すぐ下から「かめエエエ」と音がした。思わぬ『亀』の主張に、たろうや子どもたちは顔を強張らせて無言になった。「……苦しそだな」どうやら亀は呼吸するのが重く、ままならないでいるようだった。

たろうが呟くと、子どもたちは不安そうに亀を見つめ、困った顔になった。

「どうしたらいいの？ このままじゃ……」

女の子が泣きそうな顔でたろうにすがる。腰蓑をつかまれて、ずり落ちそうだった。

「何処からきたのだろうか。海からだろうか……」

腕を組みながら、たろうは考えていた。

「海って、川を下って行けばいいの？ 流れて行ってくれる？」

子どもがそう言い出していた。

「そうか。川に連れてけばいいんだ！」

子どもが勝手にそう決めつけていていた。たろうは、「ううーん……」と、唸るばかりで動こうとはしていなかった。

「早く！ 早くしないと死んじゃうよ！」「そおれえ！」

たろうが考えている間に、子どもたちは1列に並んで亀を押し出し始めていた。たろうも仕方なく、「はあどっこいしょ」と亀を押しして、持ち上げた。大人の男の力が加わったことで亀は、案外簡単に川へと運ばれドボンという大きな音とともに落ちていった、そして……

流れていった。

「さよ～ならあ～」

子どもたちが手を振っていた。亀は、川の流れが思うより速く強

く、甲羅だけを水面に浮かべ晒して流されていった。「これで良し
たろうは頷いた。自己が満足したらしく、しきりに頷いていた。

「本当に亀だったのかな」

「さあ」

子どもたちは亀が見えなくなるまで姿を目で追った後、鬼ごっこ
を始め、走って去って行った。

ひとり残されたたろうは、予定していた釣りをしようと、竿を片
手に川下へと川原を歩いて行った。今日は鮎でも釣れやしないかと
夢をみているかのようにぼんやりとした顔をしていた。

「夢か……」

たろうは、考えていた。自分はこのまま、年老いて死んでいくの
だろうか。それとも、年老わないで死んでいくのだろうか、単純
に2つの行き先を思いついてしまっただけで一向に止まらず、考え続けて
いた。

てくてくと、歩いているだけの足と、そのせいで擦れて減らす
川原の石の群、たろうは、すぐ傍で止まらず流れている川のせせら
ぎを聞きながら、考えが止まったままで固まってしまっているのを
はあ侘しい、と感じていた。そしてそのままに考えるのを止めて、
発想を変えていた。もしいつか嫁でもきてもらえたなら、いいんだ
けどなど、希望を抱くことにしていた。そうだ、亀が助けた御礼に
自分を訪ねてきてくれたらいいんだと、たろうは妄想をし始めてい
た。釣りをする場所を求めて歩く足が軽くなったような気がして、
跳んでみたりしていた。さらに妄想は続き、御礼にきてくれた亀は
類をみない絶世の美女で、そうだな、名前は乙姫がいいなど、顔が
歪んで締まりがなくなっていた……

川下の先は確かに海へと出るが、その前に傾斜90度直下型の滝
があった。

(後書き)

せめてたろつが1番をちやんと歌えたのなら良かったのですが。
ご読了ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0765n/>

作者と浦島ストーリー

2010年12月6日01時30分発行